



2014.1.20

35

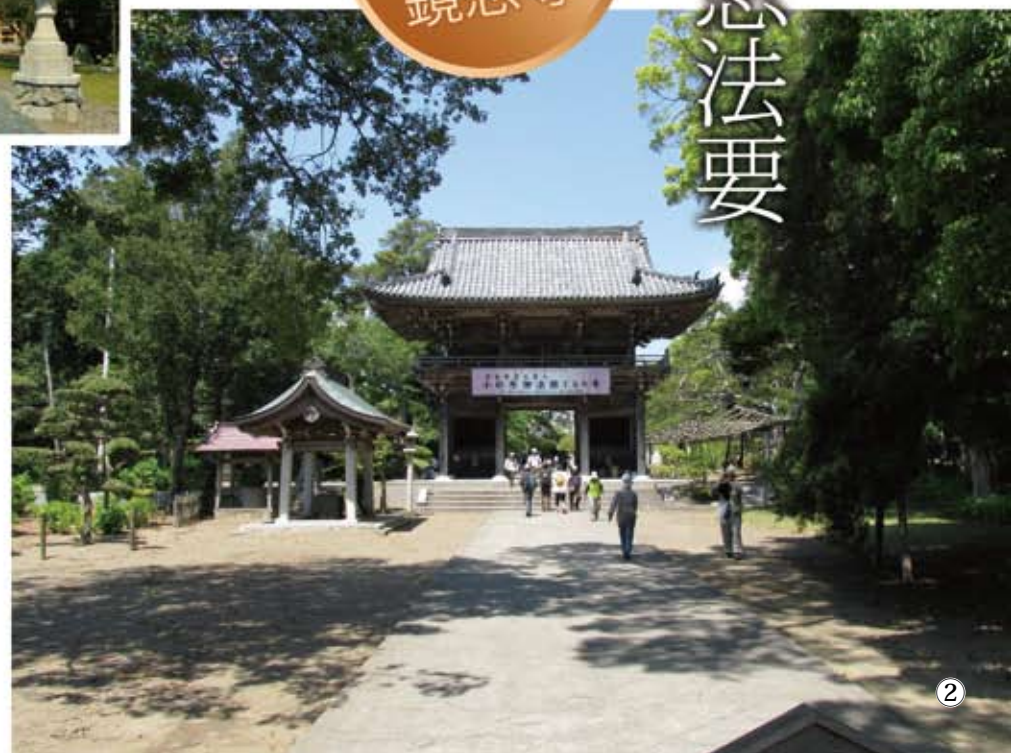


「横山光子画伯」

日蓮聖人

小松原法難七五〇年報恩法要

平成25年
10月19日
鏡忍寺



主催・日蓮宗兵庫県東部宗務所

学習

小松原法難

文永元年（1184）11月11日の夕方、日蓮聖人と弟子信者10余名が安房国東条の郷松原大路（千葉県鴨川市）において東条景信らの襲撃を受けた事件を指し、東条法難とも呼びます。

弘長三年（1263）2月、伊豆流罪を赦免されて鎌倉に帰った聖人は、翌年の文永元年、安房へ帰郷されました。『可延定業御書』というお手紙に「日蓮悲母をいのりて候ひしかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり」とありますから、母親の病を見舞われたものと考えられます。

母親の回復を祈り、少し回復に向かった為、10月花房蓮華寺を訪れ以前の師匠であった道善房に面談し、11月11日、天津の工藤吉隆公の屋敷に招かれ向かう途中、松原大路において、地頭東条景信の襲撃に遭われました。東条景信にとって聖人は、地頭の権力の前に立ちはだかる敵対者であると同時に、浄土教を批判し宗教生活の根本を非議する極悪人でありました。

景信の聖人に対する憎しみは強く、聖人の帰郷を機会に迫害を加えんとしたものでした。松原は東条郷の一面にあり、当然ながら地頭東条景信の支配下にある場所です。聖人一行の動静は十分探知しての襲撃であったと思われます。10余名の聖人の一行の中でも応戦できるものは3〜4人でありました。

降る雨のように矢を射かけられ、電光のように太刀を斬りつけられるなかで、弟子一人が殉死し、二人が重傷を負い、聖人自身も頭に傷を受け、左の手をうち折られました。応戦が功を奏したか、救援が駆けつけたものか、景信自身が目的を達成したと判断して手を緩めたか、ともあれ、襲撃の中で命を落すことなく危機を逃れました。

この事件について、約一ヶ月後、南条兵衛七郎に送ったお手紙に「今年も十一月十一日、安房国東條の松原と申す大路にして、申西の時、数百人の念仏等にまちかけられ候て、日蓮は唯一人、十人ばかり、ものの要にあふものはわづかに三四人也。いるやはふるあめのごとし、うつたちはいなづまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は大事のてにて候。自身もきられ、打たれ、結句にて候し程に、いかが候けん、うちもらされていままでいきてはべり。いよいよ法華経こそ信、心まさり候へ」と、当時のありさまを具体的に記述されています。

弟子の鏡忍房は殉死し、後に襲撃のあった地に鏡忍寺が建立されました。



そこのお坊さ〜ん
柵の中に
入らないで
くださ〜い!

新神戸駅から、いざ出発



昨年は、日蓮聖人小松原法難七五〇年祥当の年であつた。すなわち、日蓮聖人が千葉県の小松原に於いて、法難を受けてからちょうど七五〇年に当たる年。このことから、日蓮宗では宗門を挙げて、報恩の誠を捧げようと行事を展開した。その一環として、日蓮宗兵庫県東部宗務所でも、その霊跡である小松原・鏡忍寺の参をはじめとする、各本山への参拝、都観光などの団体旅行を二泊三日の旅で展開した。

その時の様子は、写真でご覧
さい。



団参の前日、東京にて会議がありましたので、新横浜駅で皆さんをお出迎え、合流しました。バスの旗を持って出迎えでしたが、誰にも宗務所長と気づいてもらえませんでした。
トホホ……。



ホテル「吉夢」にて宴会。
若いお坊さんたちの清興に、
川原修法師会長ご満悦。
その後はロビーにて、ミーティング



日蓮聖人出家得度の霊場・清澄寺



翌日未明、誕生寺の朝勤に参詣する
ため、暗いうちからホテルを出発。
眠いなー





川原誠純師

⑨



辻田観諦師



高羽俊泰師



釋 孝修師

⑧



東京プリンスホテルにて夕食会。
 所長「あす池上本門寺まで一緒にさせていただきますが、その後、所用のため、神戸まで一緒に帰ることはできません。明日は、ご挨拶させて戴く機会はないと思いますので、ここでご挨拶させて戴きます」



日蓮聖人ご入滅の霊場・池上本門寺



茂原・藻原寺



山の生活は あー、忙しい

頭の片隅ですつと気になりながら、とうとう期限切れを迎えてしまった。

700平米ほどだろうか、隣接の山林。程よい地形ということもあって、ここをマイ公園にしようと企んでいる。つぎ込む金は無いので、これまで随分体力をつぎ込んで来た。

小さい木なら問題ないが、何十メートルもある大木だとその大きさに威圧され前に立ちすくんでしまう。「フーッ……」

実際なめてかかるとンデモナイ事態に見舞われる。高い所にワイヤーロープを掛け、ウインチで引つ張り、根っこを切りながら徐々に倒していくのだが、時には緩めたりする。その作業の途中、緩めるためのボタンを押すと、不用意に覗き込んだ顔面にウインチのレバーが突然跳ね返って顔の骨が砕けそうな勢いで激しく顔面にブチ当たり、失神するところだった。大木であるほど、まるでスローモーション



くはずの『山のたより』が届かないことが噴出しました。その後も、例年届

シヨンのようにゆっくり倒れるが、どの方角に倒れてもいような安全な場所であってもその瞬間、心の臓がバクバクする。

更に、山を平に整地するのに、時間がある時だけの作業ではあるが、もう何年続けているだろうか。人様から見れば、なんとクレイジーな奴だと呆れ果てることだろう。

まだまだいろんな作業がある。山の斜面が崩れないようにとアレコレ考えてみたが、これは土木業者に依頼しないとどうみても無理だろうと、頼んでおいた。が、本堂建築にも金かかるしなあ……、なんとか自分で出来ないだろうかと改めて考えてみると、蛇力コ（フトンカコとも言つ）設置するの

「山のたより」を元日にお届けできなかった言い訳はまだまだあるが、これ以上続けても見苦しいのでここで止めておくことにしよう。

元旦の新春祈禱会の後、「今年は『山のたより』ありません、ゴメンナサイ」と挨拶すると、「エーッ？」とか「あらーッ」とか、プーイングにも似た溜め息混じりの声が噴出しました。その後も、例年届くはずの『山のたより』が届かないこと



に対して思いのほか反響があることに、「コリヤいかん」と慌てふためき、執筆に取りかかりました。この世にパソコンと言つものが出現し、その進化たるや日進月歩どころではない。そのような中で、本や新聞などの紙媒体メディアは消えてなくなり、手紙もメールにとって替わるだろうとの予測は疑う隙もなかった。たしかに、メールは早くて便利だし、一時期ブックリーダーと言つ電子書籍を購入して新幹線の車中で読みふけたこともあった。しかし、書店に入って、膨大な量の文庫本の中から「これ」と言つ本を探す時のワクワク感と、本の感触など、やっぱりいい。特に、年賀状は絶対無くならない。

やっと本題に入るが、元日の年賀状を待つひととき。まだ明けやらぬ暗い時間に眠い目をこすりながら元旦のお勤めを始め、白い息を吐きながら初日の出をみんなで迎え、一通りの正月行事を終える。やっと家族だけでお屠蘇とおせち。当然と言うより正月三ヶ日の義務であるかのように、朝ッぱらから酒を呑む。よく効く。



もう来てるころだろう。まだかな？チラッチラツと掛け時計に目を遣る。少し前まで、まだ娘たちがいる頃は、末娘の章子がいいカモだった。郵便ポストは建物から遠おくく離れたガレージの中。

「アッコ、もう来てるから、行つこい」

「なんでアタシが行かなアカンねん、おニイが行ったらいいヤン」

「いいから、早よ行けコラ」

ほどよく酒もまわって、激しいジャレあい。

「おネエ行きたいや、いつもアタシばかりやねんから」

「年賀状取つてくんのは、召使いの役目やん。アツちゃんの仕事や」

「バーカー」と吐き捨てて出て行ったが、手ぶらで帰って来た。

「まーだ来てなかったやんか。マジ腹たつわ。ブンブン！もう絶対行かへんからな」

「アッコ、今のは予行演習や。あと10分経ったら行つてこい。今度は絶対来てるわ」

「無理！」とおせちをつまみだす。

「アッコ、ほら10分経ったぞ、行つてこい」

「無理。なんでアタシばかり行かなアカンのよ。今度はおネエ行きたいよ」

「家んなでお前が一番ブスなんやから、ブスが行かなアカンで決まってるねん」

「ほんなら1番ブスはおカアで、2番ブスがおネエやから、アタシは一生行かんでいいことな、決定ーッ！」

「早よ行つてこい、ブスッ！」

「おニイが自分で行きーや。ちょうどダイエツトにいいやん」

「お前が嫁に出て行ったら、取りに行かんでもいいことになるで」

「おネエより先に行ったら、おネエに悪いしな、ヘッヘッヘーッ」

しどろしどろ重い腰を上げ、ドッサリ持つて帰って来た。

「絶対おニイには見せへんからな」と後ろ手に隠している。

こんな正月風景も今では様変わりして、幼子の世話をしている嫁に行つて来いとも言えず、自分で取りに行くしまつ。

今年もドッサリと届いた。みんないち早く見たいところだが、まず私の前に置いてくれる。この瞬間がたまらない。どれどれと、一枚一枚裏表ゆつくり見たいところだが、そうはいかない。「ボクに貸して」と、一年生の孫が横取りして、

仕分けにかかる。ま、いいか。

★寝屋川の中村さんか、電話では明るい声が聞こえてくるけど、体調が芳しくないと言う。早く元気になるといいが。

★おつ、正文からや。何十年も合っていないけど、元気にしとつか？高校時代、学校帰りに、しょっちゅう六反田のお前の家に行きよったなあ。

★中野の前チャン、とがんとつと？遊びに来んね。

★脇田さん、いつもお世話になります。「天は二物を与えず」の通り、説教は旨いけど、字もなかなかのモンやねえ。

★本松寺の御前様から戴く漢詩。ハガキを逆さまにしたり、横にしたり、裏返したり、悪戦苦闘。スラスラと読めるようになりたいなあ、いつも憧れて拝見しているが、憧れのままで終わってしまうんだろなあ。

★晴与ちゃんの字は、まるで手本のようにキッチリしていて、「全然イヤミのない上手な字やねえ」と、本妻が横からのぞきこむ。

★村井所長ハガキがいちばん目を引いた。なんせインクが緑色だもん。瞬時に脳裡にひらめいたのが、梓みちよの歌のあのフレーズ「緑のインクで手紙を書けば、それはさよならの合図になると……」

★「エッ？……こんなに若かったつけ。まるでアイドルやん。ほんとは何歳？」
23歳の福島寛子さん。

★奈良の木村さん、片隅に記されていた『悩みごと相談』ご連絡ください。あのー、お金がないんですけど……。

★島根の河瀬さん、似顔絵旨いねえ。

★京都の山下さん、今年は手抜きじゃない？いつもセンスのある賀状なのに。しょっちゅう京都に行ってるのに、いつもご無沙汰でほんとにゴメンナサイ。

★「オッ！」同じ屋根の下の孝彦から。長い時間手に持ったズーッと穴のあくほど凝視していると「お父さん、何か言いたいんやろ？ケチつけるとこ探してんねんやろ？」それもそのはず、ここ何年と闘って来た。私も、息子に負けてたまるかとばかりに年賀状作製に力を注いで来たし、息子は息子で父親を世界最強のライバルと対抗意識に燃えている、はずである。「うーん、もひとつやな」と言うと、ニヤッと返してきた。

★北海道の土子、「アントレ」「グレイス」「ティアラ」「エミリオ」「カルロス」「ダ

ニエル」こんなに犬飼うとつたら、エサ代そうとうかかるやろ。本当は犬の写真載せたいのに、泣く泣く馬の画像を載せなイカンこの年回りの悲劇、辛かったやろなあ。

★大塚猊下に於かれましては、筆勢に見る限り往年と変わらず、お元気なご様子。可祝。

★能勢の石原さん、また新しい環境で慣れるまで大変でしょうが、それ以上痩せないように。よかつたら私の脂肪を差し上げます。クール便で送りましょうか？

★「はるちん」のママ、今年も御髪がもつともつと巨大になりますように。

★口之津のケンタロー、忠霊塔のショーヘイ、高校卒業以来一回も合っていないあ。杖、入れ歯、ハゲ、白髪、糖尿、高血圧、前立腺、白内障、尿漏れ、巴、頻尿、どれだけ当たってる？

★日蓮宗の代表的布教師・大西さんの写真は、いつも味わいが深い。見入ってしまう。

★小平猊下は毎年一文字、今年は「恩」。かなりの枚数でしょうに、すべて自筆。恐れ入ります。

★荒田町の中澤君、宛名、代筆やろ？君はもつと旨いもんな。

★島原の岩永さん、今年はいつになく年賀状早かったですねえ。

★茂原の田澤さん、業界では名声を馳せた方が、退いて執着するでもなく、山登りを楽しんでいる生き方、ステキです。憧れの人です。

★私にとつて旨い字ランキング第一位を挙げるとすれば、中寺の藤田さんかな。旨くなりましたーい。この歳では無理か。

★丹後の貫名さんからも、滋賀の坂上さんからも、姫路の増井さんからも、ずっと年下の私に、毎年ご丁寧な年賀状を戴き恐縮しております。

★康子ねえちゃんも和代ねえちゃんも老け込んだらイカンよ。加津佐グループの従兄会しよか？

★尼の辰巳君、相変わらず緻密な絵図すごいな。描いているあなたの姿想像するわ……、ギョッ！

★みなさんお待たせ致しました。しんがりは、なんつても新婚のA達っちゃ。インパクトはピカイチ。クオリティーは……、イマイチ、だが、何度も見ても。平成26年度、年賀状大賞、ケッティー！



読者の皆様に、気持ちよくご堪能いただくために、原寸大で、モザイク処理しました。

明石・立正寺のA達君は昨秋晴れてお嫁さんを迎えた。私も祝辞要員の主賓としてお招きを受け、出席しました。若い人達の余興で大変楽しいひとときであった。お嫁さんの紹介の中で、彼女は資格マニアで各種たくさんの資格免許を取得していて、つい最近「結婚直前に、危険物取り扱いの資格を取得した」と披露された。「エッ？あんな可愛い子が爆弾処理をするワケ？立正寺周辺には太平洋戦争時の不発弾がまだたくさん埋まっているのだろうか」などと思い巡らせ、明るくて可愛いくて清楚な感じの若いお嬢さんであるだけに驚いたことを記憶している。時は流れ、さほど流れていないが、元日に届いた渾身の大作「A達の年賀状」を見て、すべての謎が解けた。

危険物は「A達君」だったのだ。天下の公道であのコスプレ、なるほど危険極まりないA達君を生涯の伴侶とする以上は、「危険物取り扱い資格」も必要と見抜いていた訳か。……、さてよ？よく見ると、彼女も危険行為に参加してるやん。



★ついでに、あのう行守寺の住所、間違いがヒジョーに多いです。永室町ではありませんから、氷室（ひむろ）町です。氷室京介のヒムロです。

ヨロシク、ロックンロール！

賀正 2014



きょうしん ☎652-0054 氷室町1-11-25 ☎078-511-9691 kyoshin@jss-kobe.com

うちの奥さまも

魔がもしれない



テーションで忙しい。

DAIGO (ダイゴ) と言うイケメンのタレントは、メンタリストと言うの肩書きだが、マジシャンとしてテレビによく登場する。

その晩は、テレビをご覧のお茶の間の皆様も一緒に言うことで、ブラウン管を通じてスプーン曲げの指導をはじめた。妻はすぐさま箸を置いて、スプーンを手にその場で立ち上がった。「肩の力を抜いて…」と具体的な指導に従って、スプーンの先端を手前に引いた。

「ギャーッ！」大きな声と同時に、手にしていたスプーンを放り投げた。

「エーッ?なにコレ。あなた、曲がっちゃった。全然力入れてないのよ、エーッ?」

「あなたもやってみて」

ヨッシャとばかりに、私もその後すぐやってみたが、全然ダメだった。力づくでも曲げられるものではない。

妻は、もう一回やってみよと、なんの惜しげも無くスプー



ギャーツ!



スプーン曲げは、念力か、トリックか、マジックか、はたまたインチキか。

息子の家族は二階で生活しているものの、完全二世帯にしているの、私達夫婦は階下で生活。子供が小さい時は、テレビ観ながらの食事など言語道断とばかりに、私達も我慢していた。今は老夫婦だけのお喜楽生活。左手にチャンネル、ひざの上にニャンコ、右手に箸。特に左手は、チャンネルと徳利とお猪口のロー



毎年、12月ころになると、「清水さん、来年の年賀状どんなん?」とプレッシャーかけられるから、ついがんばっちゃう。因に、今年の年賀状は、これだけの素材を加工、修正、組み合わせて作成しました。毎年、ハードルが上がります。



ンを取り出し、またフニャーと曲がっちゃった。奥に秘められた超能力を発見した気分なのか、すっかり調子に乗って、ここから量産体勢にはいった。引き出しをガバツと開けて、スプーンをわしづかみで取り出した。「そんな、もったいないやんか。もういいやろ」「いいの」と意に介さず。曲がったスプーンでカレーを食べるのも、乙なモンだ。



一般世間には、お坊さんと言うと、お寺の住職と同義語と捉える人が多い。お坊さんの中には、住職でない人の方が多い、多分。

将来の自分の進路を決める時、会社勤めの家庭は別として、自営業などの家庭では、「親の後は絶対継ぎたくない」「家業は継ぎたくない」と思う人が多い、多分。その傾向はお寺の家庭においてなお顕著である、多分。

お坊さんへの道

四男として生まれた私自身の場合、生家のお寺は長男が継ぐと言う暗黙の了解があったこともあって、比較的自由な立場。信仰の篤かった母親は、四男の私にだけ「教信」と言う、坊さんにふさわしい名前をつけたことでもわかるように、しきりに坊さんになることを勧めた。思春期に坊さんに憧れて、出家を志願する人はそんなにいるモンではない。だが坊さんなんかになるか、フン！ かつこわるい。馬齢を重ねたこの歳だから、自由に吐露できるし、同じ年格好の坊さん仲間と話していても、同じような心情を告白する人が多い。そんな中、最近、お坊さんになりたいと出家志願する人が多いのである。

日蓮宗では、坊さんの資格を取得できるまでには決められた課程を一段一段クリアーして進まなければならない。初期の段階では「読経検査」がある。全国各地で実施していて、ここ近畿教区でも毎年、20人前後の受験者がある。

私は近畿教区長としてその「読経検査」の主催者と言う立場にありながら、昨年は受験する弟子の師匠と言う立場でもあった。弟子と言っても息子はすでに10年前に資格を取得しているので、今回は50代の中途志願の弟子の話である。

出家の動機について質問すると、会社経営が傾くと周りが掌を返したように豹変したと言う。

「もう（会社が）アカンとみたら、ホント人間で汚いモンですわ。もうイヤです、こんな世界から早く足を洗いたいんです」

この事がきっかけになったが、ずっと以前から坊さんへの憧れがあったと言う。

大型ベンツを乗り回し、毎日キタの高級クラブで惜しげも無く札束をばらまいていた羽振りのいい頃のライフスタイルが抜けきれないのだろう。でっかいガタイに、ヤクザ

もシッポ巻いて逃げ出すようなファッション。鬼瓦に坊主あたま。私が興味本位に話をむけると

「ヤクザなんか全然怖いと思ったこと無いです。それよりも、街歩いとつても避けてくれますモン」

こんなヤツでも話しているうちに、コイツは優しい気のいいヤツだなと判ってきた。

「いま社長だけど、これから坊さんになるとなると、一人前になるまでは虫けら以下やぞ、耐えられるか？」

「ハイッ、頑張ります」

こうして始まったが、会社の清算に伴い、負債の問題やら弁護士との接見やら相当忙しらしく、たまにしか来ない。たまにしか出来ないお経練習で、上達するはずがない。

「お経のテープとかCDとかどこで買えばいいんですか？」
それから時間を見て自分なりに努力しているようだが、対面して一々文々叩き込まないとダメだ。



「オイッ、今度近畿教区で二泊三日読経講習会を開催するけれど、行くか？ 時間取れるか？」

「はい是非とも。なんとかやりくりして時間取ります」

「よし解った、ただし読経練習だけやで。最終日の読経検査はお前はまだ無理やからな」

と言っておいたにもかかわらず、読経



みごと、不合格。

講習会の開講式の折に「師匠、試験受けさせて下さい」と申し出たので、無理だと思ったけど経験するだけでもいいかと了承した。読経講習会の最終日に、会場である京都・本山立本寺に向いて、主任講師である厚海上人と話した。

「厚海さん、うちの弟子どう？」

「うーん……、昨日遅くまで特訓したんだけどねえ。ちょっと厳しいかなあ……」

予想通りの反応だった。

考查当日。毎回、近畿教区12名の宗務所長の中から、私が審査委員長を指名しているが、今回は和歌山の野田所長にお願いした。

正面に、私と野田所長が座り、両脇にその他の所長が座る。順番が来て呼ばれた受験者は、所長が居並ぶその前で読経を指示される。ヤツの番が回って来た。野田所長の指示に従って読経を始めるものの、トホホ……。私は、側にタオルがあったら、たぶん投げ込んでいただろう。



オーツ!



住職 算数に悩む

三が日も恙なく過ぎて通常生活に戻った。さあ、仕事始めは新年のお札や行事案内の発送作業から。セットを封筒に入れて、宅急便のシールを貼って、終了ッ！

あなた一ツ、私、封筒数えるから、台紙から剥がしたシールを数えて。「はいッ！」数えた……、また数えた……。何回やっても、68……？

……？、うーんこんなはずないけどなあ。少し手渡しした分もあるが、それにしても 200 近くはあるはず。

「え？ 68？あなたどんな計算してんの？」

台紙 1 シート 4 列の 7 行やから、28 枚や。それが 6 シート。さっきから、 28×6 の計算してんねんけど、何

回計算しても 68 や。床に

這いつくばって封筒を数えていた妻が「どれ」と立ち上がり、のぞきこんできた。

「私見とくから、あなた紙に書いてもういっぺん 28×6 のかけ算してみて」

「 6×8 は 48 やろ、次に 4 上がるから、 $2 + 4$ は 6 やん。ほら 68 になるやんか、な」

妻は「プッ！」と同時に大笑いした。

「な、やないやろ。あなたなんちゅうかけ算してんの？」と言いつつも、いつまでも笑いが止まらない。

「あなた、かけ算のしかた忘れたん？あなたいくつ？こんな小学生でも簡単にできるかけ算。アホになったんちゃう？」

「ちゃんと見ときよ」とかけ算の計算方法を指導し始めた。

「 $28 \times 6 =$ やろ」と紙に書き出したから「横やなくて、縦に書いてくれ」と注文。

「 6×8 は 48、これは合ってるやん、次に 4 上げたのもいい。この次やなあ、あなたは、上げた 4 と 10 の位の 2 を足しただけやん」

ここまで来て、妻は真顔で私の脳ミソを心配しはじめた。

「あなた、ほんとに大丈夫？ほんとに解らないの？」

額に手を当てたままかけ算のメモをじっと見つめたままの私を心配そうに覗き込み、また続けた。

「10 の位もかけ算しなあかんでしょ、 2×6 は 12 で、上がった 4 を足したら 16 でしょ。そやから、168 になるやん、ホラ見てみい」

そやそや、そんな計算方法やったなあ。ボケた訳ではないが、あの時、ネジが一本抜けていた可能性が残る。

【写真上】のように、ドラム缶でお湯を沸かし材木を暖め、

【写真左下】のように、柔らかくなった材木を引っ張り、しばらく冷ますと、

【写真右】のように、曲がった材木のできあがり。



H26/1 現在の状況。まだ、足場を組んだままです。





いいね！



和服のススメ

姪の結婚式に出席した。あたりまえだが、婿さん側の親族皆さんとは全員初対面。すぐく目立ったようだ。

早い話が、うさんくさい出で立ちに写るのだろう。

「あの和服着たサングラスの人、だれ？なにしてる人？」

最近、別にサングラスでなくても色の着いたメガネがあり、特別なものでもない。それでも、みんな色メガネで見る傾向がいまだにある。

それに、和服着ているだけで、目立ってしまう。

所長会議をはじめとする各種の会議に、年間でかなりの回数の出席する機会がある。五十人くらいの出席者の中で、和服は私一人。就中、議長として、メインテーブルの中央に座るために、いろんな意味で注目的になってしまふ。

どう写っているか知らないが、極力和服を着るように心がけているし、挨拶の中でも、皆さんに和服を着るように推奨している。

「テレビを観ていると、京都の市長さんは必ず和服を着ている。いいですねえ。」

正直、ちょっとめんどくさいけど、和服着ると、背筋がシャンとしている。

たぶんこんな噂をしているんじゃないだろうか。

「清水教区長は、いつも和服着てるけど、いつも同じモンやなあ」
もう一着くらい欲しいけど、これしか無いねん。

見た目、そのスジの人に見えるかも知れないけど、ほんととは、孫と一緒に風呂に入って相好を崩している優しい人ですよ。



天孫降臨の里

高千穂峽

姪の婚礼で長崎に行った。九州まで行くついでだから、高千穂峽に行ってみたいと相方が言う。確かに、高千穂峽の観光ポスターを見ると一度は行ってみたいと思うほど素晴らしい観光地のようなものだ。そんな予定もあつて車で行った。駐車場に行くと、平日にも関わらず、観光バスが続々やって来て観光客がいっぱい。車を駐めて、周辺案内地図を見たり、土産もん屋のおばちゃんに確かめてみると、かなり遠くて溪谷だけに階段がハンパネエー。傾斜が急な上に、気の遠くなるような長さ。普段から足が弱い相方、コリヤー無理だろうと心配。

「お前、行けるか？」

「せっかくここまで来たから、がんばる」

老婆は私に手を引かれて、階段を一步一步。やっとたどり着いた。うーん、苦勞してでも来る価値は、確かにある。

正確に言うと、まだ目



的地までたどり着いてはいない。と言うのも、観光ポスターで見る高千穂峽は手こぎボートでしか行けないのである。やっとたどり着いたボート乗り場には長蛇の列をなしている。が、ボートの数が多いせいで、回転が早く、案外早く順番が回って来そう。

若いカップルが多い。順番待ちをしながら、先にボートに乗り込むカップルを見ていると「あれあれ？なんでみんなボートこがれへの？」と、首を傾げるほど大混乱で、なかなか楽しませてくれる。

「アイツ、こぎ方、逆やん。そんなんで前に進むわけないやろ、アホッ」

「左の赤シャツ見てみい、左右力のバランス悪いから、グルグル回つとんのじゃ。お前ら、そこで一生回つとれ」

「あの若ハゲ、そつちやないで反対やで、あーあ、とうとう浅瀬に乗り上げてみた。みんな見てる前で必死に脱出しようとして頑張ってるけど、あれじゃ無理。彼女は恥ずかしそうに下向いたままやん。降りたら絶対別れるで。お前らも、そこで一生暮らせ」

「あーぶつかる、ぶつかる。止め方知らんから、ホラぶつかってしもたやん。あ、女同士ケンカ始めた。アカンアカン立ち上がったたら、ボートから落ちるで。ボートの監視員、ボート見とらんと、早よ行かんかい。それとも、海上保安庁の巡視船呼ばか？」



天孫降臨の里

高千穂峽



奥さんか彼女が知らんけど、目の前で繰り広げられているテンヤワンヤの光景を見て、指差しながらしきりにウンチクを垂れている。となりで聞いていると、このオッサン関東弁のようだ。

「ワッハッハ、あんなこぎ方じゃダメなんだよ、ダメダメ。オールをこう持って……」

と、ボロカスにけなししていたこのオッサンに順番が回って来た。

女の前でエエかつこしようとしやべつてばかりいたいやなヤツだったけど、同世代とあって、ボートこぎ

くらい朝飯前なのだろう。

「オット、そんな乗り方するからヨロヨロするんじゃ。あんまり危なから、彼女思わず救いの手だしたやんか」

オッサン、やつと腰を降ろし、頭かきながらテレ笑い。

「オッサン、今の、わざとやる？ 漫才で言うたら、ネタ振りやろ？ 落語で言えば、枕やろ？ アンタは、ボートこぎの天才やもんな」

お、さすが！。出だしはバッチリやん。ウンチク垂れるだけのことはあるな。

「エーッ？ どこ行くねん、コラ、オッサン。まだ3メートルも進んでないのに、こっち向いてどうすんねん。オイオイ、片手放して頭かいとったら、グルグル回ってまうぞ。ホラ見てみい、回り出したやんか」

もう、オッサン、パニック。いちばん恥ずかしいケースの見本。このオッサン

「スキンヘッドの兄ちゃん、もう帰って来たん？ 5メートル進んだだけで、前後左右しただけやもん。あきらめたんか？ まだ時間あるのに」

ボートの棧橋から、両側に屹立する高い絶壁の間をぬって細い溪谷があり、約200メートル奥までがコースになっている。途中、大きな滝を避けながらのコースだが、そこには絶景が広がる。棧橋からこぎ出すボートは、絶景ポイントに向けて皆同じ方向に進むはずだが、棧橋を離れたすぐ先では、あっち向いたりこっち向いたり、戻ってきたりグルグル回ったり、そんな風だからあっちこちでボート同士がぶつかり合い、もう大渋滞。幼少のむかし、生家にあった泉水で、無数のアメンボウが勝手気ままに泳いでいる光景を思い出した。渋谷の交差点で突然信号が消えたら、こんな事態になるんだろうなあ……、とも。

私達の前の順番には、同じような年齢好の夫婦が並んでいた。このオヤジ、



とオバハン、この後楽しい旅行続けられたらどうか、気がかりでならない。

ここまで原稿書いている時に、相方がのぞき込んできた。

「あなた、どんなこと書いてんの？ あ、あの高千穂峽のことね。フムフム。あなた本当はこの後の事を書きたいんやろ？ そやろ？」

「え、なんで判るの？」

「そんなモン、すぐ判るわいな。あなたの顔に書いてある」

「えー？ どうしようかなあ？ は

いちばん奥の絶景ポイントに向かって更にぐんぐんスピードを上げる。

「あなた、カッコイイーッ！」

奥に進むに従って、ボートの数が少なくなる。更に進むと、大きな滝が落ちていて、うまく交わさなければずぶ濡れになり、先へは進めない。更にその先は逆流している箇所があって、川の流れより早いスピードでないと、物理的に進むのは不可能だ。「なにをー！」目の前に立ちはだかる逆流に、上腕二頭筋のツインターボのスイッチが入り「ウィーン！」とうなりを上げた。滝を昇る鯉もビックリして腰を抜かすほどの勢いで爆進し、全てのハードルをクリアして、ゴールである一番奥の絶景ポイントにたどり着いた。

「あなた、スゴいわね♥」

そこは、絶壁に囲まれた薄暗い場所で、私達以外だれ一人いなかったのです。こし気味悪かった。

「早く帰ろ」

ボートの棧橋に着岸した瞬間の、凱旋した覇者の気分が忘れられない。



ずかしいなあ……」

「書きたいくせに」

妻が、あんまり書け書けとけしかけるから、ボートを、いや筆を進めます。私の番が回って来た。

「オイッ、見とれよ！」

スーッと乗り込んで、オールをにぎるやいなや、波をけたてて猛スピード。数多戯れるアメンボウの群れを右に左にスイスイ避けながら、一気に大渋滞の交差点を抜けてしまった。そこはもう別世界。行きつ戻りつなんとか進んだわずか数隻のボートが浮かんでいるが、彼女たちの熱い羨望の眼差しに目もくれず、

宴の後

兄貴どもが、時々母親のご機嫌伺いに帰っていることを考えると、いつも冠婚葬祭でしか帰郷することない私は、少々母親にすまない思いがある。大正10年生まれだから93歳くらいだろうか、まだいたって元気なのはありがたい。

昨秋も温泉施設で大宴会に興じた。お決まりの「あーコリヤコリヤ」と飲めや歌えやの狂乱騒ぎ。還暦過ぎた子供達がみんな仲良く酒席に興じている風景は、母親にとって一番のご馳走なのだが、出かけるのはしんどいと、今回はお留守番。

宴会もさることながら、今回一番印象に残ったのは、男兄弟四人が床を並べたこと。

嫁さん達の部屋（大奥）では話題に尽きないだろうが、男兄弟はそうはいかない。風呂に入って、布団の上でお茶をすすりながらポツポツと会話するくらいだが、それはそれで味があるものだ。時空を共にしていると言つ内なる感慨と言つものだろうか。

そんな中、東京都千葉市の武さんはのたまう。

「いっでん、赤山に行く時、飛行機の中から行守寺の水源池の見ゆったたい。いっぺん写真は撮ってやろかいと思とつとばてんにゃ」

「旅客機の巡航高度は二万メートルくらいじゃろ？そがん見ゆつどかい」

「んにゃ、見ゆつとて」と、東京都千葉市の武さんは譲らない。

そんなやりとりをふと思ひ出して、空を見上げてみた。確かに、航路は水源池の上だ、いつも行守寺の領空遥か上空を飛んでいる。で、問題は、見えるか？だ。

グーグルアースで、高度を一万メートルに設定して確かめてみた。くつきり見えるジャン。



高度1万メートルからの空撮画像。白い○の中が、烏原水源池。
烏原水源池の畔に行守寺がある。



2

4

3

1



「え？お前は1回て？オレは3回……」
べつに、絶倫を自慢している訳ではない。
会話の内容は、夜中に何回起きるか、ズバリ頻尿。



★檀家の横山光子さん。新聞紙のカラーの部分をかき、台紙に貼り合わせ、一枚の絵に仕上げます。四季の風景、風物、花鳥風月、いろんな作品があり、それぞれ大変素晴らしい。その中から一点拝借して、表紙に採用しました。

★日蓮宗の機関紙『宗報』の表紙には、横山さんのちぎり絵が使われています。

★読者の中には、いろんな趣味や特技をお持ちの方がいらっしゃると思います。『山のたより』に出品してみませんか？大勢の方に観ていただけますよ。



毎年、一月十七日は新聞テレビなど、阪神大震災関連一色。当日の日の出を撮影に、メディア各社がやって来るが、今年はNHKクルーがやって来た。

日の出撮影を終え、ついでのと言った感じで、突然インタビューしたいと申し出て来た。カメラを私に向けたまま、今日の日の出を迎えての思いを語ってくれと言う。その言葉の端々からは、「大変辛く悲しい日々だった」などのコメントを引き出したと言う気配があり感じ取れた。

実際、当日のニュース、関連番組など観ていると、インタビュに答えているコメントは、メディアの思惑どおりと思える内容一辺倒である。

しかし私にマイクを向けたクルーは不幸であった。期待しているコメントを引き出したいクルーは、何遍も同じ問いかけをしてくるが、住職はなかなか言うことを聴いてくれない。

「毎日、楽しかったですよ。したくても出来ない体験ですからねえ」

こんな取材結果を持ち帰ったクルーは、上司に罵倒されたのではないだろうか心配だ。

「おまえらーッ、なにやってんねん！こんな使い物にならんモン取ってきやがって」

その晩、妻は期待してずっとニュースを観ていたが、私の顔が流れることはなかった。

「こんなモン使えるか、ボケ。ボツじゃ！」

晴工雨筆

やっと最終ページの編集にたどりつくころには、肩から背中にかけてのスジがパンパン。風呂から上がって「おいっ、頼むわ」と毎晩妻のマッサージがつづく。

今までは、何ヶ月も前から、ヒマな時に、時々原稿を書きながら、ダラダラと手がけて、12月中旬にやっと完成。と言う流れでやってきたが、人間、追い込まれると、脅威のパワーが出るもんだ。

元日から原稿を書き始め、画像を加工し、レイアウト、編集となんと20日間で完成した。

あーあ、肩こった。

きょうしん 078-511-9691

kyoshin@jss-kobe.com

http://otera.jss-kobe.com/

★《山のたより》は無料配布ですので、親しい方にも差し上げて下さい。制作費が高額になっていますので、100円カンパでご支援戴きましたら助かります。ゆうちょ銀行 14310-16423801 シミズ キョウシン